



寄居ロータリークラブ

YORII ROTARY CLUB

会報



IMAGINE
ROTARY

R.I.会長
ジェニファーE.ジョーンズ
第2570地区ガバナー
村田 貴紀
第4グループガバナー補佐
金井 福則



令和5年5月17日(水)

会場 ホテルシティプラザ寄居

第2692回例会

司会 (SAA) 野村文昭 (SAA)

点鐘 津久井 大雄会長 (12:30)

ソング 奉仕の理想

1. 会長の時間

津久井 大雄さん

皆さん、改めましてこんばんは。今日は暑いですね、本当に真夏のような天気です。今日、熊谷の八木橋の前を通りましたが、高齢の温度計が設置されており、ラジオで34度を超えたと聞きました。私も56歳になり、年々歳を取るときつく感じます。今日、現場で仕事をしているとき暑いと感じ、かなりの水を飲んだなと思います。ロータリークラブの平均年齢も64歳で、ちょうど荻野さんと山口さんの年齢が平均ですので、先輩方、毎年言っていますが、くれぐれも熱中症にはお気を付けてください。

先週、幹事と一緒に深谷ロータリークラブ40周年のお祝いと本庄ロータリークラブ60周年のお祝いに行ってきました。やはり本庄ロータリークラブは歴史と伝統がありますね。また、高崎クラブや前橋クラブの仲間もいて、素晴らしい会と感じます。冒頭の挨拶の際にも少し述べましたが、私が寄居ロータリークラブの会長になるにあたり、とにかく本庄ロータリークラブを目標にして取り組んできたいと話しました。佐藤会長からさまざまなことを学び、1年間本当によい経験をしましたと伝えました。また、私個人のことですが、本庄ロータリークラブ60周年記念ゴルフコンペで優勝することができました。スコアはたまには言ってもいいかなと思いますが、44-37という結果でした。最近シンペリの津久井ということで、シンペリには非常に私強いもので、またいい思いができました。本当にありがとうございました。

今日は久々の加藤先生の卓話があり、とても楽しみにしています。加藤先生、今日もよろしくお祈りします。それと申し訳ありませんが、私ですが本日は最後まで参加できず、急遽消防団の会議が入ってしまったため、最後は松本幹事に点鐘してもらいたと思います。本日もよろしくお祈りします。



2. 幹事報告

松本 則之さん

皆さん、こんにちは。急に天気も暑くなってきましたが、皆さんは体調に気をつけながらお仕事やロータリー活動を精力的盛上げていただければ嬉しいです。

さて、幹事報告をさせていただきます。まず、ロータリー手帳が届きました。後ろに購入者名簿と一緒に置いてありますので、手帳を申し込まれた方は一部を受け取って



いただき、受け取りましたらチェックを入れてください。例会終了後に受け取りをお願いします。

それから、各委員長の方へ、先週配布した委員会の計画書についてです。締め切りは来週となっておりますので、

引き続きご協力をお願いいたします。

また、甞れ2570プロジェクト委員会の企画として、入会3年未満の会員を対象にしたワークショップと花火大会鑑賞の企画が地区から計画されました。

日時は8月5日(土曜日)で、寄居の水天宮の日に行われます。まず、本庄で集まりをした後にバスで寄居に移動し、そこで懇親会を行います。その後、再度バスで本庄市民会館へ戻る予定です。対象会員は権田さん、高倉さん、高田さん、豊田さん、野村さんの5人となります。

終了時に案内を配布しますが、これは甞れ2570プロジェクトの渾身の企画となりますので、できるだけ多くの方に参加していただくと幸いです。ご協力よろしくお祈りいたします。

以上が幹事報告でした。ありがとうございました。

3. 委員会報告

(1) 出席推進委員会

小宮 俊光さん

皆さんこんにちは。出席委員会から報告をいたします。

今日は楽しみにしている加藤先生の卓話があるので、余計なことは一切言わず、必要なことだけを述べます。

例会日	総員	欠席	出席	MU	出席率
5月17日	33	4	29	0	87.87%
5月10日の修正出席率					90.9%

(2) ニコニコボックス委員会 松本 幸男さん
 皆さん、こんばんは。司会の声が良いので、私も今日はいい声でやりたいと思います。久々の夜間例会のニコニコボックス、皆さんの熱い気持ちを、気持ちを込めてお伝えしますので、よろしくお願いします。

津久井大雄さん 今日暑いですね。帰宅してからの生ビールが楽しみです。
 加藤さん、卓話楽しみです。

松本則之さん 加藤さん、卓話楽しみにしています。気温も暑いですが、それ以上に熱い情念でいきましょう！

佐橋正行さん 加藤さん、卓話楽しみです。
 荻野幸一さん 加藤さん、卓話楽しみです。
 浅見克一さん 何を題材にしても、先生のすてきな卓話。本日は大変楽しみです。

鈴木光則さん 津久井会長、本庄ロータリー記念コンペ、優勝おめでとうございます！！お見事です。

柴崎 猛さん 清水さん、荒川グリーン（一年中桜に出会える会）総理大臣賞受賞おめでとうございます。

柴崎 猛さん 加藤先生、卓話楽しみにしています。
 柴崎 正さん 加藤さん、卓話楽しみにして来ました。今日の暑さもあって、頭の中を空っぽにしてあります。

清水浩一さん 加藤さん、卓話楽しみです。
 清水浩一さん トンボ公園だよりNo.136を配らせていただきます。ご一読いただくと幸いです。

加藤祐司さん 本日は卓話を担当させていただきます。よろしくお願いします。

大久保知明さん 久しぶりの加藤さんの卓話。楽しみです。

安齋治一郎さん 暑かったり、寒くなったり。体に気をつけましょう。

小宮俊光さん 加藤先生、久しぶりの卓話です。楽しみにしていました。宜しくお願いします。

三友俊一さん 本日、よろしくお願いします。
 荻野真仁さん 加藤さんの卓話、楽しみにしていました。

橋本則彦さん 今日暑かった！！
 本日もよろしくお願いします。

下条 誠さん 昨夜、自宅の階段から滑り落ちケガをいたしました。身近な所にも危険があ

りますので、皆様、気をつけましょう。
 森田淳一さん 加藤さん、卓話楽しみにしています。本日もよろしくお願ひ致します。

小鮎哲夫さん 突然暑くなりました。おからだ大切に。加藤さん、本日の卓話、よろしくお願ひします。

権田 功さん 今月、お陰様で70歳になりました。
 権田 功さん 前回欠席のため。
 高倉隆綱さん 本日健康診断へ行ってきました。4年ぶりに身長を測ったら…
 1cm伸びてました!!!!嬉しい!!!
 本日はよろしくお願ひ致します。

押田大助さん 暑くなりましたが、元気をだしてがんばります。

野村文明さん 先月の例会、欠席してしまい申し訳御座いません。本日もどうぞ宜しくお願いします。 **大きくいただきました。**

松本幸男さん とにかく暑いです。体調管理をしっかりと行ないましょう！！加藤さん、本日の卓話も勉強させていただきます。よろしくお願ひいたします。

津久井大雄会長

今日は委員会報告も順調に終わり、久しぶりの加藤先生の卓話を楽しみにしています。先生には上手な字の書き方についても話していただけると嬉しいです。最近はパソコンなどで文字を各機会が減ってしまいましたが、字は人の個性を表すといわれるように、実際に字を見るとその人の特徴が感じられますよね。私の母もとても上手な方だったので、私も小学生のときに習字を習っていましたが、遊んでばかりいて字は下手でした。ですので、今日は先生の講義を聞きながら、少しでも学びたいと思います。時間もたっぷりありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「卓話」

加藤 祐司さん

改めまして皆さん、こんばんは。先ほど会長さんから「字が上達する話」とお電話でお伺いしましたが、正直に言いますと、それに特化した内容を想定していなかったため、少し戸惑いました。本日配布した資料は、手紙や便箋など、現在の小学校や中学校で使用されている教科書のコピーです。



これは対人関係で、文字と言うのはどのように関わるかについての資料です。皆さんにとって、私が話す内容は釈迦に説法のように感じられますが、失礼ながら資料を配布させていただきました。それに加えて、空海と最澄の手紙である「風信帖」というものがあります。この風信帖とは、平安時代に書かれた手紙の形式であり、現代においても伝統的な文化と

して手紙の書き方に取り入れられているのです。小・中学校においてもこの書式が基本として取り入れられています。

文字文化は、昨日今日において書き方が変わったわけではありません。実際に、平安時代から存在していた書き方であり、意識的に人間関係を大切に、表現する手段として用いられてきました。我々は文字文化を受け継ぎ、小学校や中学校においてそれを取り入れています。また、「風信帖」は高等学校の書道の教科書にも掲載されています。このような文字教育は、小中高を通して行われており、その一環として資料として皆さんに配布させていただきました。

いきなり本題に入ってしまったのですが、私は今月初めに津久井会長から卓話の依頼を受けましたが、ロータリーでは「ノー」と言えないという考えが強くなりますので、その依頼を断るわけにはいかないと思い、引き受けました。私自身、65歳の時に入会し、現在は喜寿になりました。先ほど津久井会長が会の平均年齢は64歳とおっしゃっていました。この情報に驚きましたが、私が入会した時の私の年齢65歳が、寄居ロータリークラブの平均年齢だったのです。12年経って、会長を何年前にお引き受けしたときに、毎回今日は何を話そうかと悩みました。今回は、私が大学と兼務で文部科学省教科調査官として6年間勤めていた際に、ドナルド・キーン氏と瀬戸内寂聴さん、そして常盤台の日本書道美術館の小山天船館長との4人での対談経験があります。その思い出がよみがえりました。最近、新聞でドナルド・キーン氏が「伝統を忘れた日本に怒り」というタイトルで、日本の書道に対する思いを語っていた記事を目にしたのです。ドナルド・キーン氏の大きな顔写真を見ると、当時のことが思い出されました。私は教育と書道の両方に関わっており、職業奉仕として、現代の教育と将来の書道について話をさせていただきたいと思いました。

そんなことで少し教育の話になると堅苦しく感じるかもしれませんが、過去の教育について詳しく話し続けるわけにもいかないので、私が担当していた頃、約20年前の話を思い出していただければと思います。当時、学校教育が週5日制に移行し、土曜日が休みになったことを覚えている方も多いかと思いますが、その時、非常に学校の風紀が乱れていると言われました。中学校や高校で全国的に退学者が1万人も出たのです。この状況では、毎年1000人規模の学校が10校なくなる計算になります。つまり、1万人という数の退学者がいたということです。確かに、かつては「落ちこぼれ」という差別的な言葉が使われていましたが、現在では避けるべき用語とされています。落ちこぼれをなくすためには、教科書の内容が理解できない子供たちを支援する必要があります。彼らが学校についていけるようになれば、学校がより楽しくなる可能性もあります。そこで学校は大胆に教育方針を変えることを決断しました。それが「生きる力」というコンセ

プトです。この教育方針は現在も続いています。不易流行とも言われる教育の不変な部分であり、「生きる力」とは、自分の人生を有意義に生きるために必要な力を身につけることです。どのようにすれば自分の人生を意味あるものにできるのか、そのためにどのような力を身につければいいのか、という視点で教育が行われています。落ちこぼれをなくすためには、教科書の内容を理解できない子供たちを支援する必要があると考えられました。そのために学校が楽しくなるような工夫や教育方針の変更が行われたのです。

学校教育が週5日制になるということは、土曜日が休みになることで学校の週間授業時間が減少し、小学生の場合、6年間で約840時間、つまり全体の15%の時間が削減されることとなります。ただし、この削減された時間が落ちこぼれをなくすための唯一の解決策ではありません。教科書を薄くしたのです。しかし、教科書を薄くするだけではだけでは落ちこぼれの問題は解消されません。学習内容を基礎・基本にしぼって、小・中・高校のすべての教科において30%を削減しました。この削減を伴った教育方針をマスコミは「ナンバーワンよりオンリーワン」というキャッチフレーズで表現しました。その時期には「世界で一つだけの花」といった歌も流行しました。また、学力評価においても、以前は知識理解を重視し、算数の計算能力や国語の漢字書き取りなど、目に見える形で点数化が行われました。それが一番最初に高得点がつく要素ですが、関心や意欲の態度も重要です。しかし、これらの要素は非常に低い評価を受けていました。しかし、本当に落ちこぼれをなくすためには、人間力というのは、単に点数化される知識・理解だけで評価されるべきではありません。それは氷山の一角でしかありません。

その時から、通知表の評価方法が大きく変わりました。評価の見直しです。私たちの時代では、国語、算数、理科などの全教科で、知識の理解度や点数化される成績が最も重要視されていました。しかし、平成10年からは通知表の評価基準が一変し、その評価項目が最も低い位置に配置されるようになりました。

代わりに、評価における観点では関心や意欲、やる気などの「見えない学力」要素が重視されるようになりました。たとえば書道の場合、『私は塾に行っても字が上手なので、先生が書いた字よりも私の方が上手いよ』といった態度を持つ子よりも、『書けないけれども一生懸命に努力し、5枚や10枚書くように頑張っている』といった姿勢を持つ子を評価しようとするのです。通知表の評価方法の変化により、成績の評価も変わってきます。最も高く評価されるのは、どれだけ努力し、継続したか、やる気を出して頑張ったかという点です。結果よりも努力した過程の重視です。そのため、見た目の学力が70点であっても、見えない学力が90点になるならば、非常に優れた成績とされます。このような評価基準が現在も継続されていると思います。したがって、皆さんがお帰りになって、お

子さんやお孫さんの通知表を見てみると、この評価基準がきちんと反映されていることに気付くでしょう。

現在は、国語における知識理解は評価項目の中で一番下に位置しているはずですが。それよりも、関心や意欲、態度、やる気、継続力などを高く評価しようとするのが学校の先生にとって大変な点です。先生方はそれらの要素を評価するために大変な努力をしています。見える学力だけで評価するという方法ならば楽なのですが、先生方にとっては大きな負担となります。また、それぞれの生徒を一人ずつ評価していく必要がありますので、授業一回分だけでなく、生徒の一学期全体を通して成長した程度ややる気の向上を正確に把握する必要があります。このような評価方法により、先生方の負担が増えていると言えます。

現在も教育の理念として、「生きる力」が継続しています。これは学校教育の重要な目的です。ただし、学習方法は変化しており、現在は「アクティブラーニング」と呼ばれる方法「主体的で対話的かつ深い学び」を重視しています。おそらく皆さんもこの言葉をどこかで目にしたことがあるかもしれません。具体的に言いますと、これまでは指導者が一方的に目標や課題、内容や方法を指示や命令で与える方法が一般的でした。しかし、現在では学ぶ課程では主体的な学びを引き出し、成長を支えるために指導助言を重視した取り組みが行われています。これは、学生や生徒が自分自身で何をやりたいのか、どのようにやりたいのか、どのような計画を立てるのか、どんなチームで活動するのかなどをよく聞き、その後方向性を表現するための助けを提供し、彼らが自身の状況に対して自主的に取り組むことを見守るというアプローチです。

学校の先生や指導者も、このような過程や方向性を共有し、若い世代が主体的に成長できる環境を整えることに期待を寄せています。

その結果、社会のさまざまな分野で、このようなアプローチの成果が見られるようになっていきます。例えば、最近の野球界で優勝した監督の一人、栗山監督の事例を挙げると、彼は若い選手を中心にしたチームをどのように作り上げたのか、その方法について語っています。

栗山監督は、選手1人1人とじっくりと話し合い、選手自身の意見や思いをしっかりと聞くことを重視しました。彼は、選手が攻撃で三振してしまったり、守備でエラーを犯してしまったりしても、怒ったり非難したりすることはありませんでした。代わりに、選手に思い切りプレーさせ、失敗を恐れずに自分たちの持っている力を存分に発揮することを促しました。彼は選手たちを信じることに強い思いを持っており、それを徹底的に実践しました。

これは学力に関する話題とは異なりますが、関心や意欲、態度などは常に重要な要素です。このようなアプローチを通じて、選手たちは自信を持ってプレーし、チームの成功につながったのです。

GIGAスクール構想についてのお話は耳にしたことがあると思います。それは、子供たちに1人1台のパソコンが与えられ、情報を得ながら学習を進めるというものです。この構想は小中学校の義務教育において全国的に展開されており、すべての小中学校で子供たちは1人1台のパソコンを持って授業に臨んでいるはずですが。個人的に購入できない場合には、町や市で貸与するなどの方法が取られています。このような取り組みの一環として、教科書も大きく変わってきています。例えば、今日は小学校の教科書を持ってきましたが、どの教科書会社も教科書の後ろにQRコードが付けられています。これを開くと、書道の場合であれば、実際の筆の遣い方が動画で表示されます。また、土地や地形などに関する教材もあり、そのポイントが動画で説明されます。子供たちは常に教科書の後ろのQRコードを通じて、先生が一度だけ示してくれた内容を繰り返し確認することができます。

このような取り組みにより、子供たちはより多様な情報を取得し、よりインタラクティブな学習が可能になりました。QRコードを通じて動画や補足資料にアクセスすることで、個別の学習ニーズに合わせた学びが促進されています。

教科書に付けられたQRコードは、全ての教科に対して導入されています。このような変化により、教師の役割も大変なものとなっています。昨年、鎌倉で行われた横浜国立大学付属学校の先生方による授業や、今年の東京での実践授業などがありました。先生方はタブレットを使用し、QRコードを駆使しながら書写や筆文字の授業を行っています。小学校の場合、授業時間は通常45分です。

「主体的で対話的で深い学び」というキャッチフレーズは、3年前に始まったばかりであり、先生方もこの新しい教育スタイルに対応するために大変な努力をしています。研究授業は、このような取り組みを実践するための学びの場として活用されています。どうするかというと、初めに自分で書き、それをタブレットに映してクラス全員で共有します。どのような字を誰々ちゃんが書いたかが全員に見えるので、それに対して対話が生まれます。対話を通じて良さを見つけ、「いいと思います。ここをどう改善すればいいと思いますか？」と他の人の意見を取り入れ、再び書いてみるように先生がアドバイスします。そして、書き終わった作品を「前回と比べてどうだったかな」と比較します。こうすることで、他の生徒が「ここが改善されていると思います」と言ったりしながら、相互に学び合いながら自分自身を成長させるという、非常に理想的な学び方です。しかし、45分の授業時間では実際には書く時間が足りません。タブレットの操作で行うことになり、意見を共有することもまた大変ですよね。先生自身も、実際に生徒に見せるために自分で書く時間や臨場感を持つ時間を作ることができないという反省点がありました。結局、授業45分間で生徒は筆で書いた字が3枚

しか書けませんでした。反省会で当然のようにこの点が指摘されました。どのように改善すればより良くなるのか、これはあらゆる教科で書写に限らず、タブレットを使ったGIGAスクール構想に基づく今の学びの進め方を模索しているところですね。

小中高の先生方も大変だと思います。私たちが受けてきた教育と、現在行われている教育は非常に異なっているということは、当然のことかもしれません。私も今日、会報を電子版ではなく紙版で受け取ったことに笑いました。常に確認しないと納得できない性格です。自分が遅れていると感じ、反省しています。こうした点から、現在の教育が大きく変わってきているという話をさせていただきました。

以前は、授業は習得、活用、探求といったステップを踏んでいると言えました。授業に参加して何かを学び、それを活用し、さらに深めるために探求するという流れです。これまでは、授業に出て学ぶことが重要でした。しかし、今では先ほどお話ししたように、主体的で対話的な学びが求められています。主体的であるとは、授業に参加する際に先生から「今日はこれを学ぶよ」と指示されるのではなく、自分自身がこの先生の授業から何を学びたいのかを自覚し、課題意識を持って授業に臨むことです。自らの学びの目標を持つことが重要です。これが主体的な学びと言われるのです。

確かに、以前は受け身の姿勢で授業を受けることが一般的でしたが、現在は常に能動的に主体的に取り組まなければ授業の意義は薄れてしまいます。受け身ではなく、自ら積極的に学びに取り組む必要があります。また、対話的な学びとは、他人の良さを認めながら修正を行うことです。たとえば、私も書道をしています。自分に自信を持つことは大切です。自信がないと書くことができませんし、筆が震えてしまいます。

しかし、対話的な学びでは、お互いの個々の良さを尊重しながら対話を行います。悪口を言い合うのではなく、良さを認め合いながら対話するのです。そこからお互いに話し合い、自分自身を向上させるための意見を取り入れて書いてみる、といった方法を経て、自己成長を図るのです。最終的には自ら結論を出し、より深い学びに進むことが求められます。

先ほどお話ししたように、各監督はそのアプローチを早々に取り入れ、学生たちと主体的で対話的かつ深い学びを追求し、チームの方向性や目標について話し合い、結論を出しました。そして、監督たちは学生たちを信じ、辛抱強く待つ姿勢を取ったのです。当時の新聞記事を紹介いたします。例えば帝京大学のラグビーチームの監督は、9連覇という成果を達成しました。彼らは上級生が率先して掃除や洗濯をし、下級生に余裕を持たせるための努力をしました。また、上級生と下級生のコミュニケーションを重視し、学生たちの主体性を引き出すことにも取り組みました。彼らは学生たちに答えを与えるのではなく、自ら

考えさせ、主体性を育むためにチーム作りに努めたのです。このようなアプローチが、学生たちの成長とチームの成功につながったのです。

また、駒澤大学のマラソン監督である大八木監督は、箱根駅伝での3冠達成後、次のように述べられています。

「かつての常勝軍団が勝てなくなった。今の選手はワンマンにはついてこない。自分が変わろう。選手には優しい言葉遣いと態度で接するように努める。走りに不満があっても、その場で指摘せず、なぜだと思いと問いかける。悩む選手は寮のサウナに誘う。1年生が丸坊主にする、そういう規制も撤廃した。また、栗山監督も、持てる力を発揮させるために選手に寄り添った。ずっと信じた。」

このようなアプローチを「啐啄同機」といいます。雛がかえるとき、母鳥が殻を上からくちばしでついてやると、うまく呼吸が合い雛が出てくるように、選手に寄り添いながら同時に適切なサポートを行うことで、彼らの持つ力を引き出すことができるのです。

3年前から新しい教育課程が導入されていますが、中央教育審議会による次の10年先の教育課程や新しい教科書の審議が既に始まっています。今から5年先や10年先の未来について話し合い、このIT時代における次世代の教育についてどのように進めるかを検討しているということです。

我々が文字を書くということは、将来的には上手な字を書くことが望ましいですが、人間性の観点から言えば、いい字を書くことの方が重要です。例えば、高校生になった場合、他人から「上手だね」と言われるよりも「いい字だね」と言われる方が、その人の個性が見られます。上手いとは、誰が見ても客観的に見て字形がきれいで、筆使いが巧みなことを指します。しかし、高校生が芸術の科目として書道を選択し、自分自身が成長しようとする際には、自分の字が「いい字だね」と言われると、字形が少し曲がっているかもしれませんが、力強さや優しさ、おおらかさなどが感じられるのです。これがいわゆる個性につながります。一律な文字を書くよりも、少し自分らしさが出る方が良いのです。少し飛躍した話になりますが、要するに結論を言えば、我々が文字を書く際には、実際には頭で考えながら書くことができませんよね。筆順に従って一定の形で書く必要があります。それは一期一会の勝負です。



どこに次の点画を書くか、次にどうするかで文字が完成するのです。実際には、我々は文字を書いているのではなく、言葉を書いているのです。

この言葉を書くということは常に人との関わりがあると言えます。係わりからは親子関係が最も近いものです。その次に、同級生やクラスメートなどの関係があります。更に、年に一度の年賀状のやり取りなど、より遠い知人との関係もあります。これらの関係の中で、皆さんは言葉の選び方や文字のスタイルなどを使い分けます。そこに人間関係力があるのです。

言葉を書く際には常に相手意識を持ちながら接することが重要です。私たちはコンピュータ時代に入ったとは言われていますが、私は手書きがなくなることはないと考えています。以前にも述べたように、ドナルド・キーンさんも同じ意見です。日本文化から手書きの良さを取り去ってしまうと、日本文化そのものが失われてしまうという危機感です。

さて、その資料について少し話をしたいと思います。私たちは結果を学ぶのではなく、学ぶ過程、プロセスそのものを重視するべきです。学ぶ内容だけでなく、学ぶ過程それ自体も重要です。筆を持って書くことによって、学びの共有化というのを図っていくと、書くことの楽しみ、喜びが増えてくるのではないかなと思います。その学びの過程について、この資料を使って5分間で簡単に解説いたします。

この例は、空海と最澄の手紙のやり取りに関するものです。当時、最澄の方が身分的には空海よりも上位でしたが、空海は唐に留学し、健闘して帰国しました。この時期、最澄は比叡山に滞在しており、一方、空海は高野山に滞在していました。この2人の間で手紙のやり取りが行われました。現在、その中で3通の手紙が残っており、特に最初の手紙は「風信帖」と呼ばれています。これは平安時代の手紙です。空海が最澄に対して送った手紙なのです。そして、前にもお話したかもしれませんが、4行目の「伏して惟う」という部分の下が空いています。これは、5行目に「法体何如」と書かれており、ここでの「法体」とは最澄のことを指しています。行末に直接「あなた様はいかがお過ごしですか」と書くことはできなかつたため、意図的に行頭に「あなた様は」と記し、最澄を尊敬して上に持ってきているのです。そしてその下、5行目には「法体何如」と「空海」という文字が小さくなっています。これは私、空海が謙虚さを表現するために小さく書かれています。普通に書いてしまうと、相手を尊重せずに人間関係が崩れてしまうことがあります。ですから、皆さんも手紙を書く際には、「私は」と言うときには、行の下、行末に書くか、文中に書きたくなつた場合は本文の文字よりも小さく書く、もっと謙虚さを示したいのであれば、その行の中心よりも右側に小さく書くという方法をおすすめします。小さく書くことで相手に謙虚さを伝えることができます。

また、この手紙では最後の方に「空海状上」と「謹空」小さく書かれていますね。「謹空」とは脇付けのことであり、現代でいうところの「机下」とか「侍史」といった意味です。つまり、この手紙はあなた様に読んでいただくほどのものではなく、机の下に置いていただける程度のものですよという意味です。自分自身を謙遜して「机下」と書くことで示しています。そういったいわゆる脇付けをして尊敬の思いを示して書かれた手紙なのです。このような書式が伝統文化や文字文化としてこの日に受け継がれているのです。

そして、その書き方が皆さんにお配りしたように、まず右上のはがきの書き方をご覧ください。現在の小中学校ではきちんと指導されているはずですが、結論から言いますと、まず最初に相手の宛名、名前を行の真中に大きく書きます。次に2番目に相手の住所を書きます。3番目には自分の名前を書きます。そして4番目に一番小さくして自分の住所を書きます。この書く順序は文字の大きさの順序でもあります。これは相手への配慮から来ており、相手の名前が中央に来なくてははいけません。小さくなつたりするとおかしいものになりますね。そういった意味で、まず間違いないのは、この郵便番号のすぐ下に相手の名前を大きく書き、「何々様」や「何々会社御中」と書けば一番間違いがないでしょう。

それから、次の封書の締めについて注意が必要ですが、この締めは勝手に見てはいけませんよという意味で、「締め」という表現なので、カタカナの「メ」ではないんですね。ちゃんと下をはねてください。「封泥（ふうでい）」ですよ。以前に木簡や竹簡の話をしたことがあったのですが、これはその名残ですよ。また、自分の住所をゴム印で糊目のところに押してあるのも、封緘の役目を果たしていますよね。開けてはいけませんよという意味です。これがいわゆる正式な方法です。現在は印刷の関係で、氏名を書いた後に日付を書き、その左下に自分の住所を書く場合が多いですけれども、厳密にはのりしろのところに全部開けてはいけませんよという意味で、自分の住所もそこに書くが一番良いですね。

それから、左側の送り状についてですね。これは宅急便ですが、自分が出す際には、皆さんもされていると思いますが、送り主の方、あなたのお名前はというのですから、お名前の「お」を消さないといけません。そして差出人のところに「何とか様」と書かれています。これは自分のところに自分で「お」を付けるのはおかしいので、これも消すか、ちょっと塗り潰しておく必要があります。そうすることで、常に相手意識を持って接することが大切です。

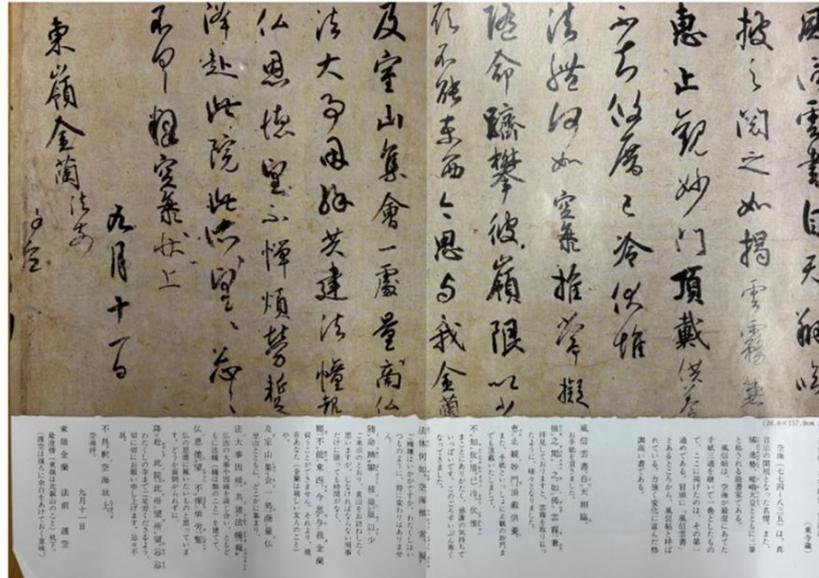
そして、「ご芳名」とあった場合、「ご芳」までが接頭語ですからね。消してください。

また、ご住所とかにも「ご」がついていますが、自分が差し出すのだから、「ご」を消して常に相手意識を持ちながら、自分が謙虚になってこういった手紙のやり取りをすることが非常に重要です。さっき、いろいろ話をしまし

たが、一つ例を挙げると、ある社長さんが外国から来たお客さんに対して、あなたの会社に行くといつも新幹線に乗るときに、同じ車両の切符番号を取ってくれるんだけど、何か意味があるのですかと尋ねられたそうです。社長さんが聞かれた後、会社に戻ってその切符を買った社員に聞いてみたところ、その社員は次のように答えたそうです。「外国の方がいらっしゃる際に、その席からは天気が見えれば富士山がいつも見えるのですよ。外国から来た方には日本の富士山を見てもらいたいので、私はいつも見える側の席を取るので」と。

これがさっき言った主体的な考え方ですね。このように常に相手のことを思いながら、謙虚に接することは非常に大切です。単に切符を手配すればいいのではなく、相手意識を持ちながら、次はどう進めるか、これを試してみたらどうなるかを考えることが重要です。これが、私たちの将来において一層求められる人間性と言えるのかもしれない。私自身も今、こういった話をしながら自分に言い聞かせています。以上で私の卓話を終わりにさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。



国際RC第2570地区第4グループ 寄居ロータリークラブ
E-mail yorii-rc@carrot.ocn.ne.jp

2023. 5. 17
No. 22

会 長 津久井大雄
幹 事 松本 則之

会報・雑誌委員長 加藤 祐司
副委員長 吉田 昌弘

- ・例会日時 毎週(水) 12:30~13:30
- ・例会場 ホテルシティプラザ寄居
- ・住 所 寄居町大字桜沢888-1
- ・TEL 048(581)2468
- ・FAX 048(581)3530